

2026 千葉県公立高校入試 国語

第四問

【解説】

(1) 活用の種類を見抜く問題。

活用の種類は動詞の後に「ない」を付けて未然形にし、「ない」の直前の音で判断する。今回の場合、ア段音なら五段活用、エ段音なら下一段活用である。

- ① 「残す」は、基本形が「残す」のサ行五段活用の連体形。
 - ② 「薄れ」は、基本形が「薄れる」のラ行下一段活用の連用形。
 - ③ 「切っ」は、基本形が「切る」のラ行五段活用の連用形。「切って」により促音便を取る。
 - ④ 「浮かぶ」は、基本形が「浮かぶ」のバ行五段活用の連体形。「浮く」(カ行五段活用)とは行が異なることに注意。
- 唯一五段活用ではない②「薄れ」が正解。

(2) 傍線部の理由説明の問題。

第一段落で写真を取ることが身近になり、感動などを容易に記録として留められるようになったという内容が紹介されている。それを受けて「しかし」という逆接で結ばれ傍線部があることから、傍線部以降に解答の根拠があることが分かる。傍線部以降では、全段落の記録を写真という媒体に残すことが容易になった一方で、「感動を閉じ込めるといふ意識が薄くなった」点を指摘している。感情起因で写真を取るのではなく、記録(写真を取る)という手段が目的になり「撮るだけで満足する」「取られた写真があまり見られなくなった」と続く。したがって、筆者が批判する内容を纏めれば良く、筆者の批判の核心は、「撮る」ことがあまりに簡単(イージー)になったことで、「忘れたくない」といふ切実な意識が失われ、撮るだけで満足してしまっている現状という点であり、これらがまとめられている選択肢を選ぶ。

ア. 第一段落の内容のみに対して言及されており、解答の根拠(第三段落)を踏まえていないため不適。

イ. 正答。解答の根拠を適切に説明している。

ウ. 選択肢の記載内容の批判が筆者の主張であるため不適。

エ. 記録メディアの必要性は解答の根拠とならないため不適。

(3) 傍線部の内容説明問題。

傍線部を含む文章は、文頭に「だから」と因果を導く接続詞を含むため、傍線部前の内容が解答の根拠となる。前段落では、「実際の教会を前にして感じた質感とはまた違ったものが、写真を前にしてみる時間をたっぷり持つことで獲得できる」「写真は意図したものがあった、写真の主要な特性が挙げられている。これらを受けて、「外の世界を切り取り写真に残し、(傍線部B) イメージを見ながら考えて世界を少しづつ自分なりに知っていく」と続く。ここまでの内容で、**実際に見ることと写真を見ることが相違点があり、写真を見て考えることで世界を知る**、という主張が取れる。ここままで概ねの内容理解は十分であるが、選択肢には眼の特性に関する記述があるため、さらに次段落の内容を見ていく。

ここでは、人間の眼は見たいものだけ見る傾向があり、それゆえ死角が存在し全体を俯瞰して把握することは不可能であり、このような眼の延長であるカメラにおいてもレンズに写った範囲だけという切り取られた世界の断片を見ることになる。しかし、この撮られた写真には先述の通り、意図せず写ることや実際に見たときとは違った感覚を得られることから、純粹な視点でその偶然を捉えて世界を考えることで世界に対する解釈を与えることが可能と議論している。

眼の特性に触れた上で、**自分の眼が捉えられなかった「世界の断片(カメラが切り取ったもの)」を、写真を通じて事後的に「考える」**ことが、**世界の理解を深める**、という内容が傍線部に対する内容説明となる。

ア・前半部の眼の説明は適当。一方で、後半部の説明が不適。世界に暫定的な解釈を与えられるのは写真を見ることであると主張しており、目の特性だけで解釈が生じる訳では無い。

イ・前半部分は傍線部の前段落に記載がある。後半部の「暗闇でも視界を獲得できる」という内容は本文に記述が無い。

ウ・意図しないものまで見えてしまう」のは、人間の眼ではなくカメラの特性であるため不適。

エ・正答。「死角」という眼の限界を、写真を通じた「思考」で補い、世界をより多く捉えるという内容が本文と一致する。

(4) 傍線部の内容説明問題

前問で触れた写真を見て考えることで世界を知るという内容を踏まえ、鈴木理策の言葉を引用し見解が述べられている。傍線部を含む文章はやや煩雑な論理構造になっているため構文解釈を行うと、主語は鈴木理策の発言内容、述語は「違和感というふうにも受け止められる」であり、述部の「違和感」は、「写真を撮るという行為が目に見える風景から『考える』という時間を写真を見るときまで『先送り』していること」と修飾されている。つまり本来、人間が何かを見る時は、その場で「考える」という営みが同時に行われるが、写真を撮るという行為は、その「考える」時間を未来へ切り離してしまう。この「**今、目の前にある現実(体験)**」と「**後で見る画像**」の間に生じる**時間的・感覚的なずれ**が、筆者のいう「違和感」の正体である。

- ア. 正答。本文中の具体例である「実際の教会を前にして感じた質感」と「写真を前にして見る時間」で得られるものは別であるという内容とも合致する。
- イ. 「内なる世界」は写真を見て構築される(前問の通り写真を見て考えて世界を理解できる)ため、違和感の原因ではない。
- ウ. 「自己イメージとのズレ」ではなく、視覚と記録(写真)との隔たりが主題である。
- エ. 他者との比較は本文中では述べられていないため不適。

(5) 本文や別の出典の内容を踏まえた空所補充問題。

「血肉化する」とは一般的には「自分のものにする」という意味で使われ、本文でも同様の意味で用いられている。傍線部直前まで前問までの内容を踏まえて『記録』として撮った写真をそれこそ穴が開くまで見てみることで、体験を思い出し、脳内で自分の記憶として血肉化することが出来る」と一貫した主張が展開されている。以降も写真を見て思考することで、単なる記録として残すだけで終わらず記憶へと進化できると述べられている。

また、追加の資料において、「(自分の言葉を) つくる」Ⅱ「考える」として主張され「考える」ことが「身体感覚をオープンにして日常生活を丁寧に行きこくこと」、「視野や関心を広げることが出来る」と述べられている。「考える」、「つくる」ために必要な要素として踏まえ、適当な解答を選択する。

I

ア・前問の通り、記録(写真)を見ることと実際の経験には時間差があるため、「記録を見ることが自分の体験を疑う」という主張は不適。

イ・同様に、実体験と写真を見ることは同一と考えられないため不適。

ウ・正答。本文では、撮った写真を見ることは「じっくり眺める」ことで、「先送り」した思考を再開させると述べている。空所の直後に「新たな発見があり」と続いたため、発見を導くための具体的な行為である「イメージと向き合う」が適切に接続される。

エ・写真には「意図せぬものまで写ってしまう」という性質があり、実際の風景との「ギャップ」こそが発見の源泉である。その「ギャップ埋める」ことは本文の趣旨に反する。

II

ア・正答。これまでの筆者の主張に加え、写真は単なる「記録」ではなく、「長い時間をかけてイメージを見ることでしか思い出すことの出来なかった些細な発見がある」と述べていることから、その発見が元の体験を補充し、自分の記憶として定着させることが「血肉化」とであると解釈出来る。

イ・写真と徹底的に向き合い得た新たな発見から、「写真を正しく理解し『記憶』へと深化」することは正しいが、世界と対話するという内容が不適。本文では「世界に暫定的な解釈を与える」という内容までしか述べられておらず、双方向的な解釈の飛躍に関して言及されていない。本文はあくまで「個人の内なる世界観の構築」をテーマにしており、世界そのものとコミュニケーションを取るようなニュアンス(対話)までは踏み込んでいない。

ウ・「衝動に駆られて身体が反応する」のは、写真を「撮る」瞬間のプロセスであり、後から写真を見る段階の説明としては不適。

エ・「二層整理されて」という内容は不適。写真を見ることで体験の中では気付かなかった要素に気付くという主張が述べられている。整然と整理するのではなく、むしろ未分化な発見を取り込むことを重視している。

III

追加の文章の内容も踏まえ解答を導く問題であるが、空所後半に「すなわち」と言い換え表現があるため、「意図的に余白を残す」という表現と近い解答を選ぶ方針で考えた方が早い。

選択肢イの「ひらかれた自由な場所を自分の中につくる」という表現は言い換えとして適当であり、追加文章中の『考える』ことが（中略）身体感覚をオープンに」という内容とも合致する。

他の選択肢ア「世界に開かれた自分を認識する力を養う」、ウ「暫定的な世界の断片であると自覚する」、エ「脳内で認識する世界観を新たに大きく広げる」、には「意図的に余白を残す」というニュアンスは無い。

（6）傍線部の内容を踏まえ記述形式で纏める問題。

この文章の核となる主張は、「現代人は写真を撮るだけで満足しがちだが、『撮ること』と『見ること』を分け、撮られた写真とじっくり向き合い考えることで、自分の眼の限界を超えて世界をより深く知ることができる」という点ある。これまでの設問の内容を踏襲し、**眼で見る世界には常に死角が存在し、眼の延長としてカメラを考えたとしてもレンズに収まる範囲の断片的な内容だけになるが、写真を徹底的に見ることで、シャッターを切る瞬間に先送りされた思考を再開・継続し、知ろうとする姿勢が豊かな感性を育てることに繋がる、**と解釈できる。解答の指定として「自分の見ている世界が」から始まるため、対比構造を含む構成にして解答する方針が考えられる。また、指定語と字数制限から適当に纏め上げる。

解答例

自分の見ている世界が「断片だと認識し、写真を通じて中断していた思考を再開し、世界を自分なりに知り直す」こと。

公式解答例

自分の見ている世界が「常に不確実だと認識し、撮った写真を徹底的に見ることで思考する時間を持続させる」こと。

第五問

(1) 傍線部の本文中での意味を答える問題。

決勝にくる学校の作品はどれも素晴らしく甲乙つけ難いにもかかわらず稀に点差が開く試合がある(本文18行目)。その一例として竹のパフォーマンスを挙げ、点差が開いた理由を貴音は「観客が惹きつけられたせいじゃないかなって思う」と分析している。

以下選択肢を吟味していく。

ア・前半の「作品の出来にはそこまでの差はない」という指摘は正しい(本文18行目)。しかしながら、先に述べた通り、貴音は点差が開いた理由を「観客が惹きつけられたせいじゃないかなって思う」と分析しており、舞台上上がるまでの過程に勝因があるとは分析していないため不適。(竹のパフォーマンスは舞台上での出来事である。)

イ・「観客には生花の知識がないために」とは本文中に書かれていないため不適。後半の分析内容は正しい。

ウ・正答。「審査は花をいける所作も対象である」は正しい(本文8行目)。また、「高得点を獲得するには観客を惹きつける工夫が必要」といった分析も貴音の分析内容(本文18行目)と一致しており、正しい。加えて、原因と理由の整合性も取れている。

エ・高得点の要因はあくまで「観客を惹きつけたこと」にあり、本文中に「竹を鋸で切るのに多大な力や技術を要する」といった記述はない。したがって、難易度の高さを理由とするのは不適。「難易度が高いから観客が惹きつけられた」という推測は一見もつともらしいが、本文にない内容を拡大解釈して正当化することは避ける。

(2) 傍線部の解釈を答える問題。

春乃は、貴音の「舞台の本番で(花いけバトルのDVDを見て引っ掛かったことが何であったかについて)気付いた。そこで台詞が飛んじまって、親父にこっぴどく叱られた。」という発言に対して「ふふ・・・。」と呟いている。

さらに、傍線部の直後には、「貴音が舞台に立っているのは未だに想像がつかない。だがそんな大事なところでも、頭の片隅に花いけバトルのことを置いてくれていると思うと嬉しかった。」とその理由について述べている(本文41行目)。

以上を踏まえた上で選択肢を吟味していく。

ア・正答。先に述べた通り本文中には「そんな大事なところ(舞台)でも、頭の片隅に花いけバトルのことを置いてくれていると思うと嬉しかった」とその理由について記されており、その呟きの理由の言い換えとして適切である。

イ・春乃が感じた喜びの核心は、「貴音の花いけバトルに対する本気度」に触れた点にある。自分しか知らない秘密を持ったことへの誇りではない。仮にそのような誇りが介在していたとしても、それは彼女の「本気」を共有できたことに対するものであり、単に「台詞が飛んでしまった貴音の動揺(いつもと違う姿)」を知ったことによる優越感のようなものなどではない。

ウ・いわゆる「なんだ、そんなことか」といった嘲笑の「ふふ・・・」ではないことは直後の文章(41行目)を参照すれば直ちにわかる。貴音と共に生花をする春乃が、貴音の「本気」を肌で感じて、「大した事ではなかった」と感じるとは考えにくい。

エ・前半の「台詞が飛ぶほど深刻に考えてくれたことを知った」とする分析は妥当である。しかし、後半の「貴音と一緒に優勝できると確信した」という記述は、本文に記述が無い。ここでの春乃の心理は、あくまで貴音の深い想いに感嘆したにとどまると解釈すべきだ。

(3) 傍線部の内容を説明する問題。

傍線部の直後、貴音は「もう一つ。参加する俺たちが持たなきゃならない覚悟がある」と語り、競技に臨む上での信念を述べている。

ア・貴音が共有を望んでいるのは、あくまで「自分たちの心構え(覚悟)」であり、運営側のそれではない。また、「これまでの話を整理したい」という意図も読み取れない。彼が真に共有したいのはあくまで競技者としての「覚悟」である。

イ・前半の「計画の重大さを理解してもらいたい」という分析は首肯できる。しかし、場の「悲観的な雰囲気を一変させたい」という点は不適。ここでの貴音の目的は、場の空気の切り替えではなく、純粹に自身の「覚悟」を語ることに主眼がある。加えて、場の雰囲気が「悲観的」であるような描写自体もそもそも本文中から読み取れない。

ウ・出場者一般が持つべき心構えといった抽象的な一般論ではなく、舞台に立つ競技者として、自分たちがどのような覚悟を持って「舞台」という場に接するべきかという文脈の話。これからしたいが故の間と深呼吸であると解釈するのが妥当。ここでは、普段から舞台に立つて演技をしている貴音ならではの、切実な「自分たちの信念」について語っている。

エ・正答。貴音は、自分が思う競技に臨む上での自分なりの重要な価値観について春乃に説明を施そうとしている。単なる情報伝達であれば落ち着く必要性はないが、共有を求める相手に対し、自身の揺るぎない信念を提示するためには、まず語り手である自分自身が完全に整った状態でなければならぬ。そのため、この沈黙や息を吐く動作は、内面的な確信を外面的な宣言へと変換するための、必要なステップであると説明できる。

(4) I・IIに入る言葉を選択する問題。

Iについて

本文38～39行目に貴音の父についての描写がある。貴音の父は舞台本番台詞が飛んでしまった貴音に対してこっぴどく叱ったと描写してあることから舞台に対して非常に厳格な人物であることが理解できる。また、59～61行目において、「参加者がお客さんに背を向けているのに、凄いと違和感があった。俺が舞台でそんなことをすれば、・・・」とある。お客さんに背をむけること⇒そんなことと貴音が言っていることから背を向けることは、「悪いこと・怒られること」であると理解することが出来る。

「そんなことをすれば、親父にI」が問題のため、Iには「怒られる」というようなニュアンスの言葉を入れればよい。

A.「称賛される」は文意に適していないため不適。貴音の親父は背を向けることに対して否定的だと本文から解釈できる。

I.「怪しまれる」も同様に貴音の親父は背を向けることに対して懐疑の気持ちではなく、否定的な気持ちのため不適。

ウ.「感心される」についてもAと同様の理由により不適。

E. 正答。「叱責する」意味は他人の過失や不正行為を強く叱り、咎めることであり、怒られるというようなニュアンスの言葉となっているため適切。

オ.「恐れられる」について、本文から貴音の親父は貴音より立場が上であることがうかがえる為貴音が恐れられることは考えにくく不適。

Ⅱについて

64～67行目に注目する。

64行目に春乃が「でも花をいけるのを見に来ている訳だし、そこまで………」と言っていることから春乃は貴音に対して、お客さんに背をむけることを気にしなくてもよいのではないかと妥協することを提案している。それに対して、「春乃、これだけはⅡ」とあった後、66～67行目にかけて「言葉の中になにか揺るぎない強さを感じた」とあることから、Ⅱには貴音の強い意志、絶対に譲れないことを表す語が入ると文脈から推測できる。

ア・正答。「譲歩できない」の意味は自分の立場や条件が非常に重要であり、決して妥協することが出来ないことであることから強い意志、絶対に譲れないことを表す語であるため適切である。

イ・「信頼できない」はなにか揺るぎない強さを感じたという記述にそぐわないため不適。

ウ・「考慮できない」は物事を決定する際に考えないという意味を持ち、文脈にそぐわないため不適。

エ・「選択できない」は本文において選択を迫られている場面ではなく、妥協案を提示されていてそれに対してなにか揺るぎない強さのもと答えていると解釈できるため選択ではないと判断できる。よって不適。

オ・「理解できない」を入れると、自分の考えに対して理解できないという文意になってしまったため不適。

(5) 下線部を基に貴音の気持ちを空欄に適当に記述する問題。

使用しなければならぬ語は繋がりが探しやすい言葉のため解答はしやすいと思われる。下線部までの文章の通り、貴音は親父の教育の元、舞台に対して真剣に考えている人物であることがわかる。73行目にて、「一円でも頂ければ玄人。それは当然だ」と書いてあることから舞台に出演する者としての心構え・強い信念があるとうかがえる。

また、自身だけでなく本文68行目～69行目にあるように「舞台上に上がれば、観客に礼をもつて接し、技をもつて魅せ、心を届けるように努める。」と書いてあることから観客に対して心尽くすべきだと考えていることが読み取れる。問題文から空欄には貴音の舞台に対する考え方を、指示された語を使って解答する必要がある。

以上より、「**舞台上に対して強い信念を持ち、観客のためを考える**」という内容で字数に合うように記述すれば良い。

解答例

舞台上に上がる以上強い信念を持つこと、観客へ心を届けることが必要である

公式解答例

どのような舞台でも確固たる信念を持ち、観客のため心を尽くす必要がある

(6) 文章全体を見て表現を答える問題。

このような問題は選択肢の該当箇所を探して吟味をする必要がある。

ア・湧き出る感情を押し殺そうとする春乃の様子を、「……」を用いることに関して、該当箇所は52行目の「それは……いい作品を見て貰いたいって……」と64行目の「でも花をいけるのを見に来ている訳だし、そこまで……」である。

これは両方とも文脈から**春乃の自信ない様子**を「……」で表していることと判断することが出来る。

52行目は貴音の真剣な表情に対して春乃が気圧されている場面であり、64行目は妥協案を提示しているが、真剣な形相の貴音を前に様子を伺いながら言っている、つまり自信をもって言えない場面であるため不適。

イ・色彩に関係する言葉を用いることで写実的に表現しているに関して、本文中に色彩に関する言葉が用いられていないため不適、

写実的…事実をありのままに描き出そうとするさま。リアリスティック。

ウ・正答。一文を短くしてリズムよく描くことで印象的に表現していることに関して、本文中にいくつか該当箇所がある。

例えば、21〜40行目や44〜65行目である。このように一文を短く、「」を連続して使用することで、時間の経過とともに貴音に魅了されていく春乃の様子を印象的に表現している。

エ・「本番前の緊迫した中で激しく意見を交わす二人の様子を……」に関して、本文中に激しく意見を交わす場面はなく、貴音の考えや意見に対して春乃が圧倒されているような描写になっているため不適。また、「それぞれの視点に立ちつつ描くこと」とあるが、それぞれの視点ではなく、春乃の視点に立って描写されていることから不適と判断することが出来る。

第六問

【現代語訳】

ある人が清水寺へ参拝したときに、年輩いた尼さんが道で一緒になって歩いていたのだが、道中ずつと「くさめ、くさめ」と言いながら歩いていたので、(男が)「尼さん、どうしてそんなことをおっしゃるのですか？」と尋ねたところ、尼さんは答えもせず、やはり言い止まなかった。(男に)「何度も尋ねられたので、尼さんはちよつと腹を立てて、

「これこれ、くしゃみをした時に、こうやって呪文を唱えないと死んでしまうと言うので、私がお世話した若君が比叡山で稚児(ちご)としていらっしやいますが、『たった今もくしゃみをなさっているかもしれない』と思うと、こうして唱えずにはいられないのです」と言った。(なんとまあ)めったにないほど、心のこもった親切心であったことだろうよ。

(1) 正答 (イ)

(2) 正答 (エ)

文脈から、「度々問はれて」と何度も質問されたことに対して、少し腹を立てたと理解することが読み取れる。

下線部より前において質問をされているのは『「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども』から**尼御前**であるため、腹を立てた人は**尼**にあたり、正答は(エ)であると判断できる。

(3) 「かくまじなはねば死ぬるなり」の「ねば」が「未然形十ば」なのか「已然形十ば」なのかを判断できたかがポイント。打消しの助動詞「ず」の已然形である「ね」と、接続助詞の「ば」であることから確定条件「くすれば必ずくする」のように訳す。

結果、この文は「このようにおまじないをかけないと必ず死んでしまう。」という意味になる。

(イ)と(エ)の選択肢は「死に至らなかった・確実に助かった」と文意がずれるため除外される。次に(ア)と(ウ)の選択肢について、(ア)「おまじないをしないと」死んでしまうであるか、(ウ)「おまじないをしたから」助からなかったであるかを考える。このとき、問題文である「何度も質問されて少し腹をたてながらもおまじないを唱える理由を話す尼」というここまでの一連の物語の流れを考えると、(ア)が正答であると判断ができる。

単に文法的に考えれば「ね」(打消の助動詞「ず」の已然形)の意味を良く反映している(ア)が望ましいという判断ができる。さらに、「なり」は「断定」の助動詞であるため、(ウ)の「このようにおまじないをしたから助からなかったのだろう。」の「くだろう」は「推量」であるから不適であると判断することも出来る。

ア・正答。

イ・「死に至らなかった」が文意にそぐわないため不適。

ウ・「おまじないをしたから」が文意にそぐわないため不適。

エ・「確実に助かった」が文意にそぐわないため不適。

(4) 五行目に、「養ひ君の、比叡山に兎にておはしますが、ただ今もや鼻ひ給はんと思へば、かく申すぞかし」と書かれている。

すなわち、尼が養っていた子供が比叡山にいて今もくしゃみをしているかもしれない(尼と養っていた子供は離れているため確認は出来ない)と思うとこのように申してないといられない(=3)より「くさめくさめ」と言わないと死んでしまうものだから)というのが文から読み取れるのである。

このことから、尼は離れていて姿が見えない子供に対しても親身に考えていること、身の安全を考えていることが読み取れる。

ア. 「比叡山にいる多くの子が幸せになりますようにと祈っている」は本文5行目の「養ひ君」から尼が養っていた、育てていた子と理解するのが妥当であるため不適。また、「たくさんのおまじないを知っていて」も本文から読み取ることが出来ないため不適。

イ. 正答。「尼が、育てた子にとっても深い愛情を抱いており、遠く離れている場所においてもいつもその子を案じていること」が、離れていて姿が見えない子供に対しても親身に考えている尼の様子と一致するため適切。

ウ. 尼君は清水寺へお参りに行っているが、作者が感動しているのは「信心深さ(神様仏様を信じる気持ち)」そのものではなく、親(育ての親)が子を思う深い愛情を表していることがわかる。また作者が「素晴らしい」と言っているのは、その原動力である「離れて暮らす子の身を案じる母心」であるため「信仰心」を主役に行っているウは不適である。

エ. 長い道のりを言い争いなく仲良くたどり着くことに対してではなく、自分のことより「比叡山にいるあの子は元気か」とひたむきに祈り続ける尼君の健気な精神(志)に対して感銘を受けたと解釈できるため不適である。

(5) (a) 正答 (ア)

「I」の空欄は「鼻ひ」の意味を答える問題である。

古文で「鼻ひ」は「くしゃみ」を指す。昔は、くしゃみをするとう魂が抜けて寿命が縮まると信じられていたため、それを防ぐために「くさめ(休息命)」という呪文を唱える習慣があった。また文脈から考えても「くしゃみ」を選ぶのが正答である。

(5) (b) 返り点の問題。返り点のルールに注意して答える。

ア. 愛にかかるレ点が無視されているため不適。

イ. 愛にかかるレ点が無視されているため不適。

ウ. 正答。

エ. 不に対して書き下し文のルールを適用していないため不適。

(5) (c) 文章全体を通して「尼」の気持ちを問う問題。

問題文の指定にある「……ないように……」という形で書くためにそれぞれの要素を考える。

本文から尼が「……ないように」と願っているのは「養ふ君」の無事と命、つまり育てた子が死んでしまわないように願っているからおまじないをかけたと考えることが出来る。

尼は子供を思う気持ちが強い人物であると本文や今までの問題から解釈できるため、それらを全て踏まえた解答を作ればよい。

解答例

育てた子が亡くならないように子の安全を願う気持ち。

公式解答例

育てた子が死んでしまわないように強く願う気持ち。